

昭和55年2月1日第3種郵便物認可
平成17年12月1日発行(毎月1回1日発行)
俳句雑誌「沖」第36巻第12号



俳句雑誌[おき]

12月号

沖 発行所

口能登

能村 研三

口能登の刈田時雨を急ぐかな

白山比咩神社三句

うろこ目の木彫神馬さやかなり

曼珠沙華小暗き所へはぐれ咲き

秋風が苛む楯のえぐり傷

節目の力

「沖」の創刊三十五周年の諸行事が終った。パレスホテルでの大会と祝賀会も全国から多くの会員同人が集まって、再会の感激に胸を熱くする場面も数々あった。私もこうした周年行事は今までに何度も経験してきたが、これまでは父が主宰であったので、どちらかといえば事務局的な役割が多く、感激を実感している時間がなかった。今回はまさに主宰としての感激を実感し、これからの責任の重さも感じた。来賓としてお招きした百名を越える方々からも、祝意と励ましの言葉をいただいた。ここに至るには、「沖」の多くのスタッフの綿密な計画と熱意溢れる努力や協力があったればこそで、心

折口信夫墓前

秋澄みて父崇敬の師の地なり

松任・聖興寺三句

風白し走り根籠めの千代尼塚

箒目のさなかに落ちし銀杏の実

秋風を受くにほどよき堂の反り

水沁みるまで穴掘りし白露かな

庭茗荷かつては父が摘みくれし

底より感謝を申しあげたい。

今回は、その記念大会を終って充実した達成感を得ることができたが、いつまでも酔いしれてばかりはいられない。

当日、私の講演の中でも述べたことだが、この大きな節目を力として心を新たに、新しい「沖」を作っていくたいと思っている。その所信については、新年号のメッセージとして詳しく述べたい。俳句の改革、結社の改革など様々な課題に取り組んでいきたいと考えている。

能村 研三



今日生きて 林 翔

「杉」も35周年

「沖」創刊35周年記念号は三〇八頁の大冊で発行され、別に『沖35年の軌跡』も二八五頁の大冊で同時出版された。編集部之苦勞を想うことしきりである。

ところで、森澄雄主宰の「杉」も「沖」と同じ昭和45年10月に創刊されたのだった。記念号は「沖」より僅かに頁数が少ないとはいえ、やはり二四〇頁の大冊で発行された。

亡き妻はいまだわれには思草澄雄作品の第一句であるが、夫人に先立たれたことでは登四郎氏と共通している。

臥しをりて豊年思ふ威銃

臥すわれのけふの奢りや菊膽

澄雄氏に「常臥し」の句が多いことは広く知られている。外出する時は車椅子である。

澄雄氏は大正八年生まれだから、登四郎氏より八歳若い。登四郎氏が第一句集『唱嚮音』を出版したのは昭和29年10月で、澄雄氏が第一句集『雪標』を出したのは同年3月だから登四郎より半年ほど早かった。

登四郎氏がひろ子夫人を亡くされたのは昭和58年、翌59年には第八句集を『天上華』と題して出版されて

蝸や今日生きて今日何為せし

秋乙女名残の日焼見せにけり

その色の風に透きゆく秋揚羽

薄雲に翳りつ映えつつ式部の実

雲は飛び今ぞ燦たる檀の実

残る虫よ愛は永久とにと唱ふのか

空と海のけぢめなきより湧く秋思

木犀よ金の絨毬まだ敷くな

御堂出づ月にも双もろ手合はすべく

名陶に秋気満ちたり欣びも

「沖」より十四代柿右衛門の壺を贈らる

いる。

朴ちりし後妻が咲く天上華

登四郎

澄雄氏のアキ子夫人は、澄雄氏の外出中に心筋梗塞で急逝されたのだった。

木の実のごとき臍もちき死なしめきは、俳壇を驚かせた句であった。

本稿執筆中に、澄雄氏が本年度の文化功労者に選ばれた事を知った。

お祝い申し上げます。

林 翔



蒼茫集



はるばると

北川英子

戻り鯉いま男手の炎をくぐり
電柱に根のあるごとく葛咲けり
棒稲架の 一郎二郎生れ小屋
赤蕪干し湖北の風巻しまきやすきかな
はるばると白鳥白を保ち来し
湖に羽音しづもり十三夜

天の泪壺

坂本京子

霧ごめの池かな天の泪壺
月祭る遙けき母と語らひつ
月光の部屋に満ちある身の湿り
漢菓を煎じるにほひ神の留守
蓮の実の飛んで灸の痕いくつ
深ぶかとのふところ矢切葱

懐古

武藤嘉子

秋声やひらり金魚の向き変る
梨を食み口中すがすがしき懐古
秋茄子きゆつきゆつと洗ふ汀女の忌
山からの風抜けやすし桐は実に
われを待つ木椅子か秋の蟬の声
堰のおと絶えて夕づく柿の里

形見分

大島雄作

秋風につかまつてゆく葬かな
秋の蝶付けてくれたる形見分
洗礼にぎんもくせいを降らしめよ
れんこんの穴と辛子と秋の風
竜淵に潜む途中の天井画
逝く秋の切取線を航く船か

潮鳴集



名 水 清水公治

萩ゆるる風韻一枝ごとたがへ
はばかりぬ老いの健啖桃する
新豆腐名水溢るるまま無人
ニアミスは仲良き証赤とんぼ
体育の日よりジョギング発心す

肩ぐるま 中島あきら

早稲の香や夕日へとどく肩ぐるま
秋光の焦点として薫焼かる
妻なにか呟く後のころもがへ
真つ白なシャツが帆となる花野かな
風は秋星座といふも点と線

武蔵塚 瀬戸石葉

支流細流大河ゆるがず獺祭忌
夜半の秋自浄の一書読み返す
火の国の露琳琅と武蔵塚
佇めば虫の音に影あるごとし
日は山を出て山に入る豊の秋

曼珠沙華 角田沙羅

地鎮祭花つけし葛根こそぎに
藁屋よりオカリナ聞こえ豊の秋
源氏読む虫の音愛づる国に生れ
曼珠沙華列なして誰を迎へむと
信号機要らぬ見晴らし稲の秋

沖作品



初雁や巖育てて妙義山

東京

坂 ようこ

手拍子は歓喜の楽器秋収め
引潮の引きのこしたる秋思とも
森にゐて魚のこち秋澄めり
おほどかや奈良の仏へ威銃
秋立ちぬ紙の表裏を分かつに
水槽に赤き橋ある厄日かな
爽やかや風の作れる雲の形
松手入終へてちくちくしてきたる
秋耕の人折り返すとき光る
秋めくやタオルばかりを干しぬたる
番記者のまくしたて癖秋暑し
決断に期日てふもの鉦叩
つくば新線地上へ出れば秋灯
九月尽小さきコラム切り抜きて
背伸びして身の錆おとす雁わたし

市川

栗原 公子

千葉

林 昭太郎

東京

高木 嘉久

能村研三選

罅多き地球に細き月昇る
燕去るまだ決めかねしことのあり
吉日を選びて燕帰りしや
ラ・フランス匂ひて一人きりの夜
身体髪膚月光に生け捕らる
掌の胡桃ふたつとなれば音生まれ
きちきちばつた月の微塵を舐めにけり
ワイングラスに月をまろばせ誕生日
文机の位置変へ月光の傘下

東京

工藤 進

涼新たな皮膚一枚の象・鱗鱗
木の実独楽に森の記憶を閉ちこめし
月光を入れて流れの勢ひけり
烏賊墨をパスタにからめ野分あと
良夜発つべガサス行きのエレベーター
老鷲に和尚口笛返しけり
蔵の町馬の蹄の音も秋

新潟

長谷川 春

たんぼの絮に小さな鍾かな
蟪蛄の拝むかたち枯れはじむ
門灯をつけて出払ふ秋まつり

岩手

栗城 静子

敬老の日堂に入つたる翁振り
蕎麦の花夕べ荒びし山の風
街の灯の途切れしところ虫すだく

千葉

佐々木よし子

日の微塵ふるとんぼうの一群に
小ぶりなる蝶ふえて来し野分あと
蓮の実の飛ぶ体勢をととのふる
晴れてすぐ稜線烟る蕎麦の花
秋日濃し島の突端まで見えて

佐久間由子

かそけくも夜の鳴子の風まかせ
ひとところ葉折れはじめの芒原
月を待つ礁打つ波やはらかに
蓑虫に貴種流離譚あるといふ
ゆるゆるとおのれ吐き出す秋の繭

神奈川

菅原 健一

老犬の仰ぎ見ている帰燕かな
秋風に何か問はれているやうな
落し水岐れて細き川生る
羊水の抜かれ稲田の深呼吸

長崎

吉武 美子

括られて雨に混じりて萩の花
残菊を灼る後ろめたさのありにけり
鑿を待つ石の肌に秋気澄む
山すその水音篩へり葛あらし

千葉

安藤しおん

ひと鞭は馬へのことば秋高し
黙深き山の身ぶるひ木の実雨
満足に形ありとせば衣被
カテドラルまでの道程去ぬ燕
水澄むやまつすぐ落ちる砂時計
こだはりの遠退いてゆく鉦叩
葛の花その一叢の風甘き
鶏頭のまつ赤沸点極まりぬ
露の世の朝のラッシュの扉開く
蓮の実の飛んで中年半ばかな

代田 幸子

諸岡 和子

新人賞予選句（十一月）

引潮の引きのこしたる秋思とも
水槽に赤き橋ある厄日かな
決断に期日てふもの鉦叩
背伸びして身の錆おとす雁わたし
身体髪膚月光に生け捕らる
涼新たな皮膚一枚の象・鱗麟
たんぼの絮に小さな鍾かな
門灯をつけて出払ふ秋まつり
小ぶりなる蝶ふえて来し野分あと
秋日濃し島の突端まで見えて

坂 ようこ

林 昭太郎

高木 嘉久

栗原 公子

工藤 進

中尾 公彦

長谷川 春

栗城 静子

佐々木よし子

佐久間由子

沖作品 選後句評

*
能村研三

水槽に赤き橋ある 厄日かな 林 昭太郎

熱帯魚を飼育する水槽や金魚鉢の中には、人が鑑賞するための演出なのか、水車や橋のミニチュアがあつてまるで海底の中の龍宮城を思わせる仕掛けがある。熱帯魚や金魚にとつても、それらが物影になって、水中の中での休みどころにもなっているようにも思える。その素材は原色の赤で塗られていて、金魚や熱帯魚側から見ていると自分と同色のように見えているのであろうか。この句のおもしろさは、二句一章の仕立てになつていて厄日という季語の斡旋である。水槽の赤い橋があることと厄日とは何の脈絡もないのだが、妙に「赤い橋」と強調したことには何か響きあうものがあつた。もう一句「秋耕の人折り返すとき光る」の句、単なる写生の句とみるよりも心象風景としての印象が深い句である。

決断に期日てふもの 鉦叩 高木 嘉久

「優柔不断」という言葉があるが、それを真つ向から打ち消すような句である。人生には物事を悩みに悩みぬいて決断を迫られる場面が多々あるが、いつまでも結論をさきまわししていても仕方がない。秋の静まりかえつた夜、チンチンと澄んだ音を立てて鳴きつづける鉦叩の鳴き声を聞きながら明日にでも決断をしようとして心に決めた。もう一句「番記者のまくしたて癡秋暑し」の句、今秋は選挙があつたせいとか、こうした場面が多く見られた。番記者は怖いものなしといった感じでまくしたてるものの、政治家も一枚上で、そんなことにはたじろぐ筈もない。

(以下略)

引潮の引きのこしたる 秋思とも 坂 ようこ

人のいなくなつた秋の浜辺に寄せては返す波の様子を見てみると何か淋しさが募ってくる。夏の海が穏やかで明るく風ぎわたつていたので余計にそんな感じがするのかも知れない。秋も春と同じように潮の干満の差は激しいが潮の引いたあととの干潟には華やかさ明るさはない。秋は人に物思いのかぎりをつくさせ、人生の寂しさ、人間存在の哀れさに触れることの多い季節である。秋思はややもすると感覚のみで捉えやすい季語であるが、引潮の引きのこしたるものという具体的なものをもつてきたのがよかつた。もう一句「初雁や巖育てて妙義山」の句、妙義山の山のでたちを見ていると中七の「巖育てて」という措辞がしっかりと頷ける。